

魅力的な政治家、育てて (大嶽秀夫さん)

朝日新聞 2016年9月8日

民進党の支持率は8月の朝日新聞世論調査でわずか8%。自民党の4分の1以下だ。党首や幹部が発信力を強め、世論を引きつけない限り、支持率回復は望めない。かつて「劇場型政治」を体現した小泉純一郎元首相を研究し、ポピュリズムに詳しい政治学者の大嶽秀夫さんに、野党があるべき姿について聞いた。

——そもそログイン前の続きも、ポピュリズムとは何でしょうか。

「政治家が、議会や政党を飛び越して直接有権者に訴えかける手法です。小泉さんのようなポピュリストは個人のイメージをてこに、動員をはかる。特に大都市圏に住む上層中産階級がターゲット。そういう意味で、私は蓮舫さんも前原誠司さんも、ポピュリストだと思います」

——ポピュリズムというと、大衆迎合といった悪いイメージもありますが。

「私は、日本の最初のポピュリストは、都知事を務めた美濃部亮吉さんだと思っています。テレビでやさしく経済問題を解説する人。大衆迎合とは違う。私はポピュリストという言葉、悪い意味で使っていません。大衆迎合というのは、ポピュリストに失礼な言い方だと思っています。たとえば小泉さんは、郵政民営化や道路公団改革など改革を実行しましたが、それをできたのは世論の後押しがあったからです」

世論の後押し必要

——なぜ世論を味方につけられたのでしょうか。

「ポピュリストが登場するのは政治腐敗の後であることが多い。河野洋平さんの新自由クラブが登場したのはロッキード事件が背景。土井たか子さんのマドンナブームはリクルート事件。小泉さんが登場したのは、森喜朗首相のえひめ丸事故前後での失態があったからです。そういうなかで、小泉さんは『自民党をぶっ壊す』と言って支持を得ました」

——仮想敵をつくって対立をあおる手法は、ヒトラーのように誤った方向に国民を誘導する危険性もあるのではないですか。

「もちろん、そういう点に留意する必要があります。メリットとデメリットを意識しなければなりません。でも、政治の世界は敵をつくらないと、ドラマになりません。有権者に後押ししてもらって、政策を実現していくという時代だから、これはやむをえない」

言葉を磨き訴えよ

「いまの政治にとって、テレビなどを使って視覚的に直接、有権者に訴えることがとても重要です。テレビに出た時に、ちょっとしゃれた言い回しをする。小泉さんはとてもそれが上手でした。長い言葉でもいいのですが、説得力のある話ができるよう、言葉を磨く必要があります。マスメディアを効果的に使い、政治家としての個性を売り込むことは、決して悪いことではないし、むしろ一番肝心なことでしょう」

——とはいえ、発信力の強さばかりで新代表を選ぶのは「選挙目当てだ」との批判も党内外にあります。

「そもそも政党は政権をとらなければいけない。野党が対案を示しても、実現できるわけではありません。まずは政権をとることに集中しないとだめでしょう。ですから、国民的な人気がある人を党首にするのは当たり前の話です」

「そのためにも魅力的な政治家を育てる以外にない。男であれ女であれ、ほれてしまうような。テレビで丁々発止の議論をして自分の意見を言える人でないとダメですね。それを支える制度として、政治家になろうと思う人が増えるよう、選挙に落ちてでも職場に戻れるような仕組みをつくることも必要です。政治の基本はボランティアなのですから」
(聞き手・松井望美)

京大名誉教授(政治学) 大嶽秀夫(おおたけひでお)さん

1943年生まれ。企業活動が政治に与える影響や外交・防衛問題、ポピュリズムなど、政治にまつわる幅広いテーマを研究してきた。著書「日本型ポピュリズム」では、小選挙区制の導入による派閥の弱体化やワイドショー的な報道番組の登場が政治に与えた影響について考察している。